

17. 慢性血液透析患者の骨シンチグラフィ

末松 徹 森田 賢 山本 洋一
鍋嶋 康司 吉本信次郎 吉田 祥二
前田 知穂 (高知医大・放)

長期にわたる血液透析患者の骨シンチグラムと生化学的検査値との相関について検討し、透析療法における骨シンチグラフィの意義について考察した。骨シンチ像で38例中30例(79%)に骨への集積増加を認め、血清ALP, PTHの両方、もしくは一方が高値をとる傾向を示した。バックグラウンドの高い症例は38例中20例(53%)で、血清ALP, PTHとも低値で、ほぼ正常範囲内にあるものがほとんどであった。骨への集積増加は、頭蓋冠、下顎骨、肋軟骨接合部、胸骨、腰椎、膝関節等に多くみられた。骨変化の早期発見上、これらの部位の読影に留意する必要がある。

RIの異所性集積は大腿動脈、大脳鎌、心臓、肺、大関節周囲に認められたが、これらのうちで自覚症状のあるものは少なく、骨シンチグラフィはmetastatic calcificationの早期発見にも非常に有用である。

18. 前立腺癌におけるHormon療法、化学療法の骨シンチグラムによる評価

米田 正也 大塚 信昭 沢井 通彦
寺島 秀彰 伊藤 安彦 (川崎医大・核)

骨シンチグラフィが前立腺癌の治療効果の把握にも有用ではないかと考え、以前より有用とされているTAP, PAP, ALP, LDHと対比し検討した。対象は前立腺癌77例で、うちすでに多発性に骨転移を示した21例についてホルモン療法、化学療法後の骨シンチグラフィを中心とした臨床評価をおこなった。前立腺癌77例の初回シンチグラフィの結果は陽性(+)44%、疑陽性(±)24.7%であった。治療効果判定をしえた21例のうち15例の治療効果をえた。そのうち、異常集積の全く認められなかったmuch improved 5例と全ての異常部位が集積軽度となったmoderate improved 5例はTAP, PAPが比較的 low値で安定していた。しかし一部の異常集積のみ低下したslightly improved 5例はTAP, PAPも安定せず、注意深い観察が必要と考えられた。また、初回骨シンチグラフィが陰性(-)であり、進捗中に陽性(+)となった例ではTAP, PAP, ALP, LDHのみでは不十分でありシンチグラフィが有用であった。